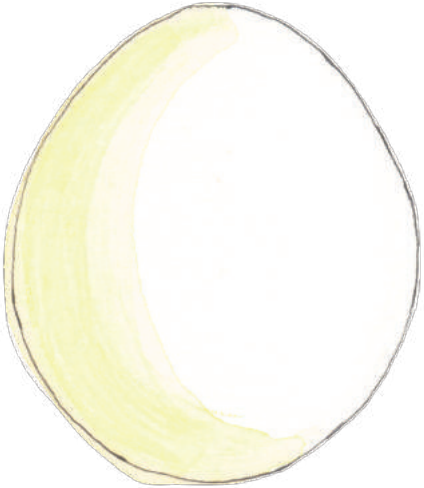
オレのポシェット

さく・が　フクイ　アヤノ

オノレのポシェット

はじまりのおはなし

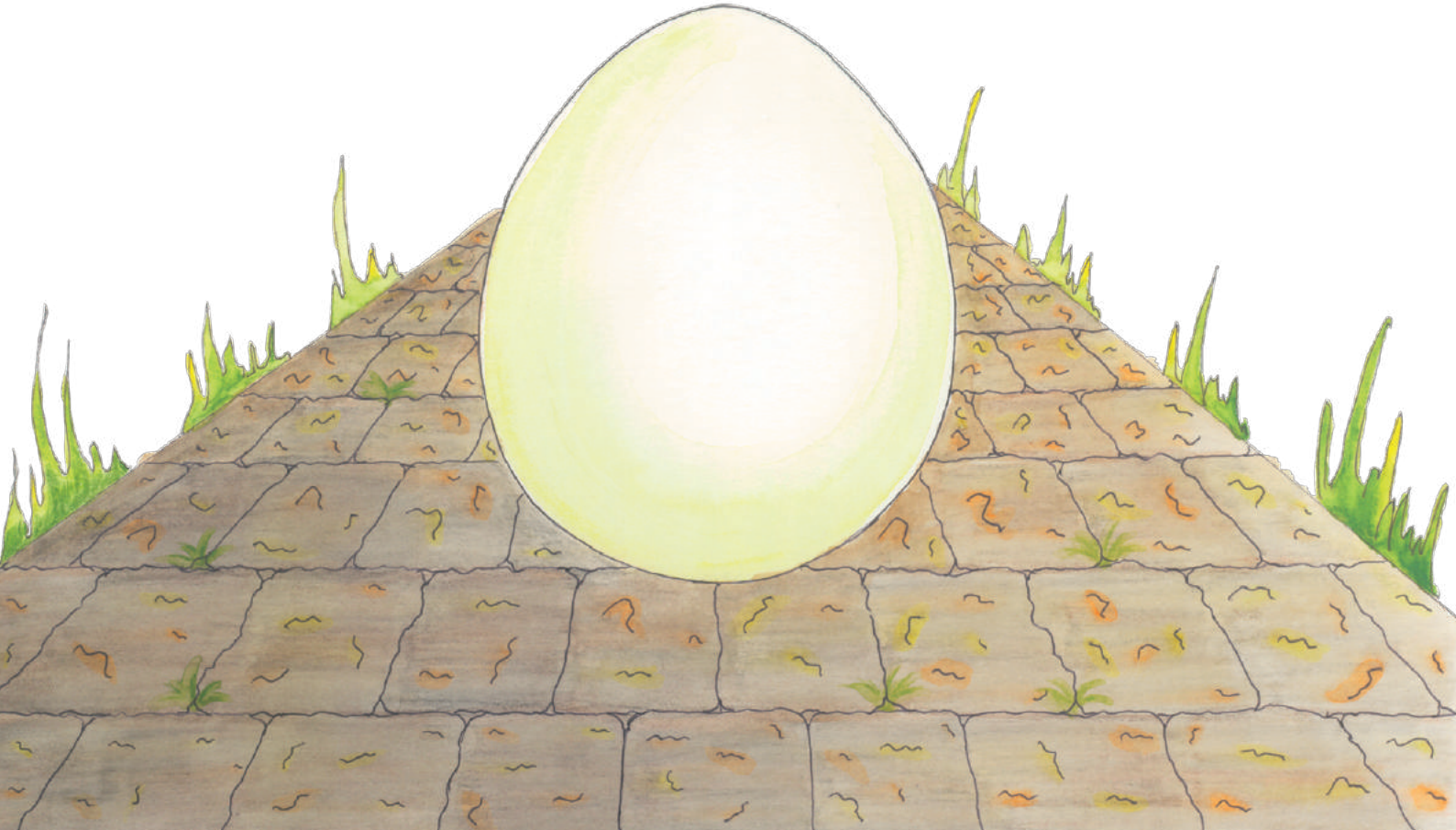


フクイ　アヤノ

ある　はれた　にちようび

おかあさんから　おつかいを　たのまれた　イレーヌちゃんと　おとうさん。

マルシェからの　かえりみち　みちのまんなかで　おおきな　たまごと　であいました。



そのたまごは　ふたりにあって

よろこんでいるかのように

バイーン、バイーンと　とびはねています。

「おとうさん！みた!?」

「すごい！たまごが　どうして!?」

ふたりはおどろいて

たちどまりました。

「ねぇ　おとうさん、このたまご　おうちに　つれていかない？」

「うーん、だけど　なにがうまれるか　わからないぞ！オバケが　でてくるかもしれないよ」

「えー！ こわいけど　それも

ちょっと　おもしろそうね」

「そうだな！

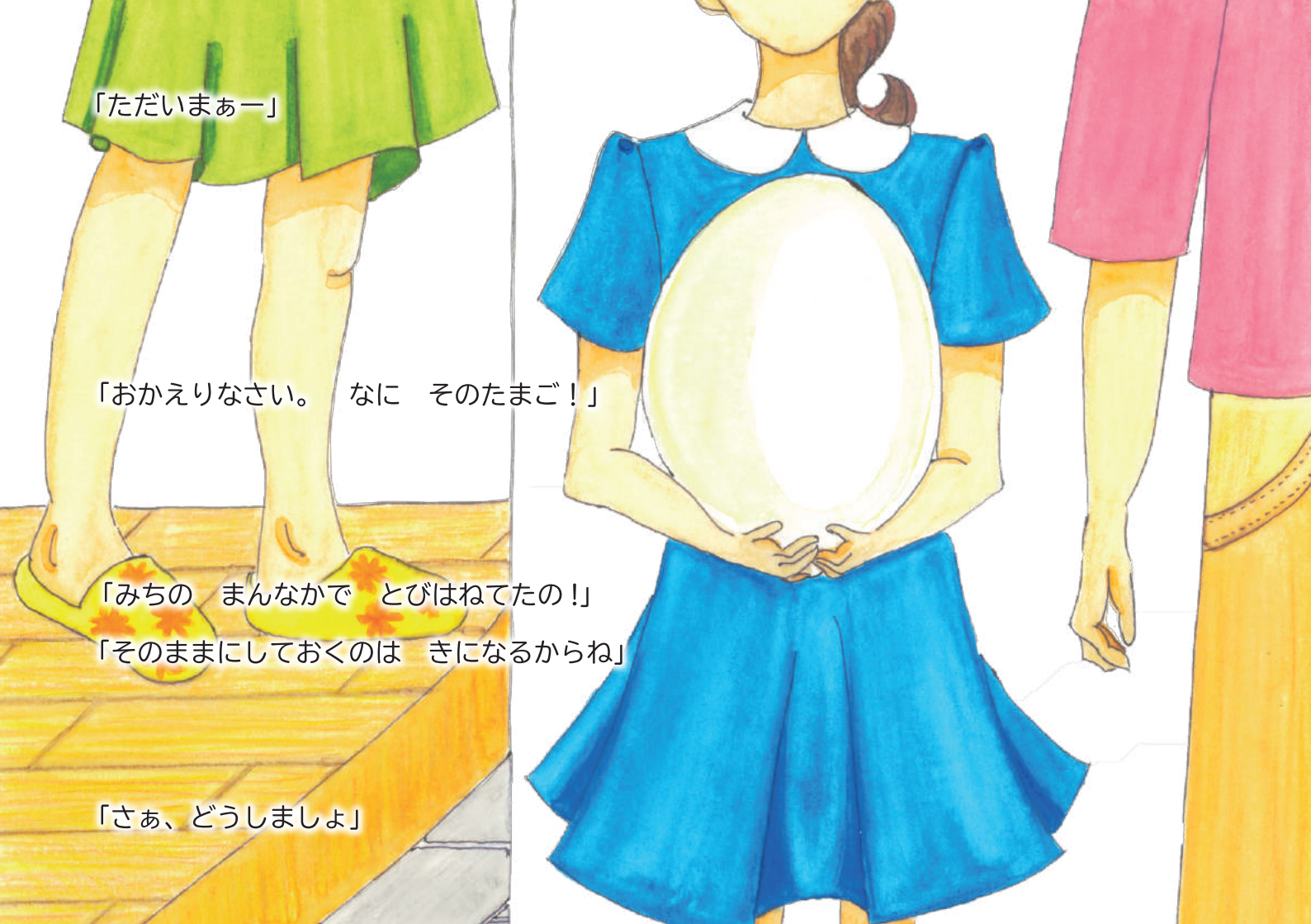
おかあさん　おどろくぞ！」

そういって

イレーヌちゃんと　おとうさんは

その　ふしぎなたまごを

おうちに　もってかえりました。



「ただいまぁー」

「おかえりなさい。　なに　そのたまご！」

「みちの　まんなかで　とびはねてたの！」

「そのままにしておくのは　きになるからね」

「さぁ、どうしましょ」

「じゃあ　とりあえずブランケットで　くるんでおくわ。
おとなしくしててね」

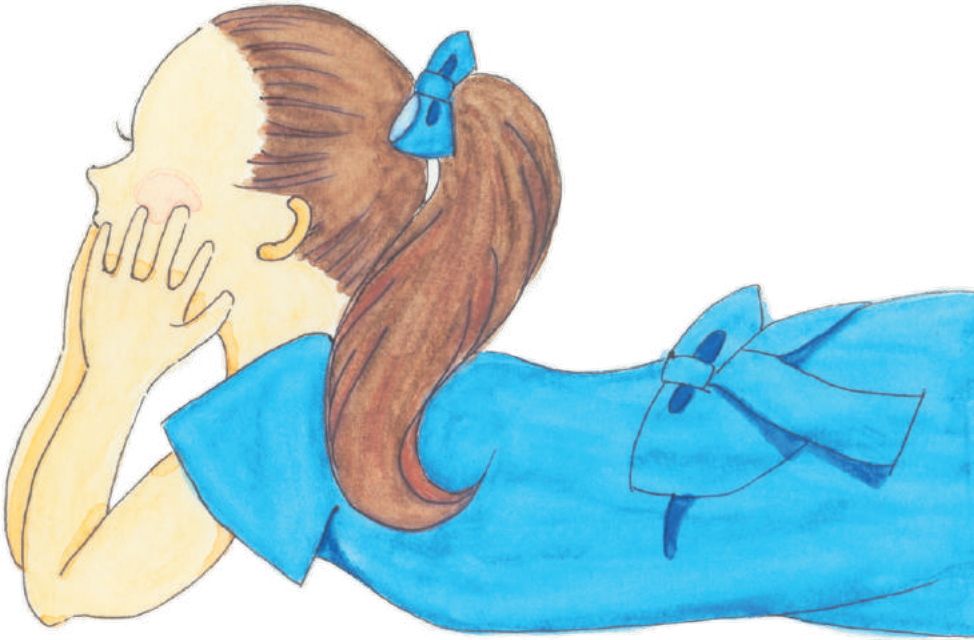
そうイレーヌちゃんが　はなしかけると　たまごは　おとなしくなりました。

「ねちゃったみたい」
「わかるの？」
「『オヤスミナサイ』だって」
「おー、すごいな」
「じゃあ　ばんごはんの　したくをしましょう」

「ごちそうさまでしたー」
イレーヌちゃんたちは　ばんごはんを　たべおわり、
おとうさんとおかあさんは　あらいものをしています。

イレーヌちゃんは　たまごのことが　きになって　ずっとそばにいました。
たまごは　じーっと　しずかにしています。

「おりこうさんね、わたしも　ねむくなってきちゃった
じゃあ　また　あした　おはなししましょう、たまごちゃん」



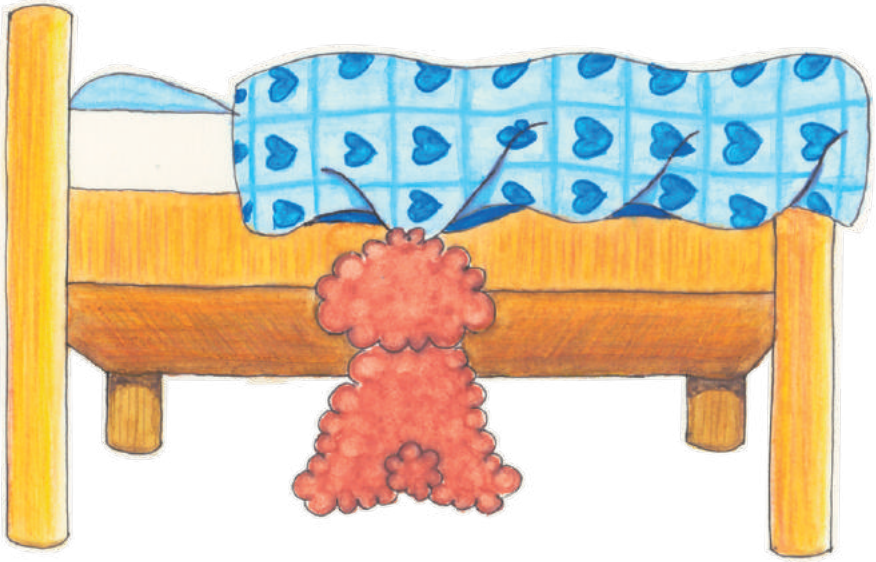
そのよる、イレーヌちゃんは　ふしぎな　ゆめを　みました。
やさしい　こえが　きこえてきます。

「イレーヌ、あなたに　すてきな　かぞくを　おくります。
きっと　あなたの　みかたに　なるから　たいせつにしてね」

そして　あさになり……

「ワンワン (おはよう)」
「うーん、だれ？ おはよう…って。えー！」

イレーヌちゃんが　めざめると
そこには　かわいい　いぬがいました。



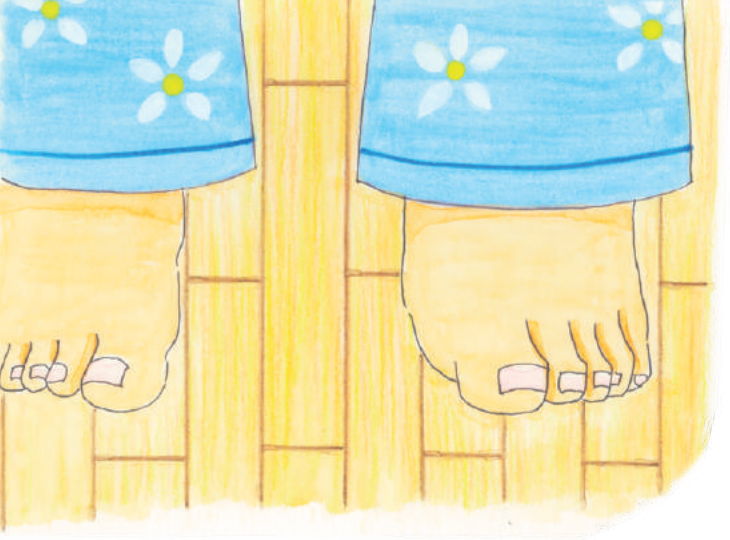
「どこからきたの？」

「ワンワン
(きのうの　たまごちゃんだよ)」

イレーヌちゃんは　ビックリして　たまごを　みにいきました。
すると　たまごは　われて なかが　からっぽに　なっていました。

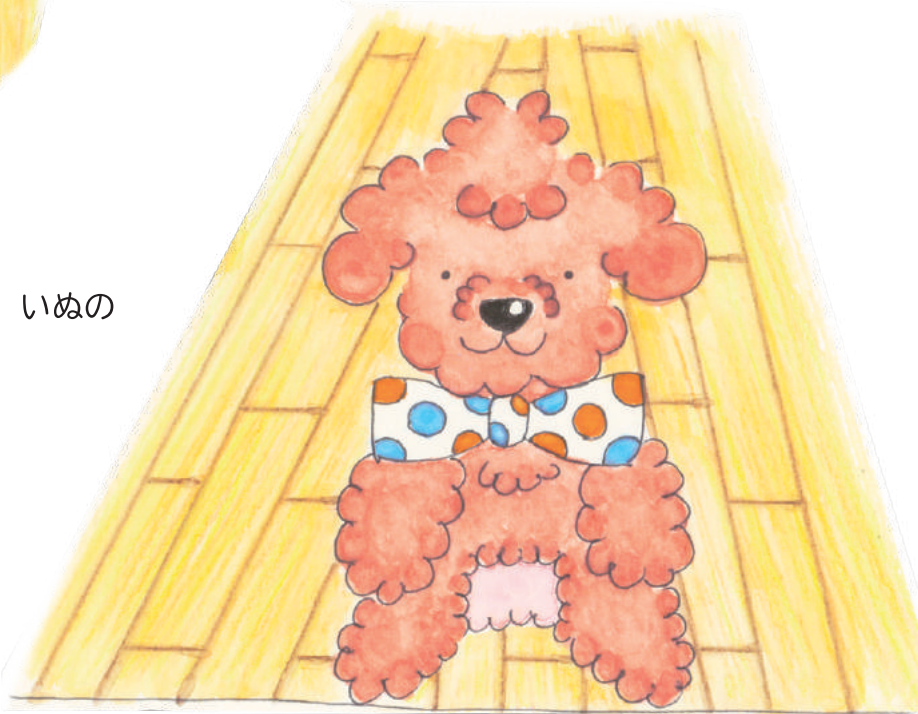
「ほんとだ！わぁー、オバケじゃなかったんだ　アハハハ」

おとうさんとおかあさんも　おきてきました。
「どうしたの、あさから　さわいで」



「きのうの　たまごちゃんのなかに
こんな　かわいい　わんこが　いたのよ」

「ワンワン」



イレーヌちゃんには　ふしぎなことに　いぬの
いっていることが　わかります。

「『はじめまして。
なまえを　オノレといいます』だって」

とっても　おどろいている　おとうさんとおかあさんでしたが
イレーヌちゃんは　ニコニコわらっています。

そして　オノレは　もっていた　ポシェットから
なにかを　とりだしました。

あたりは　にじいろに　かがやき、
あまりの　まぶしさに　めを　つぶってしまうほどです。

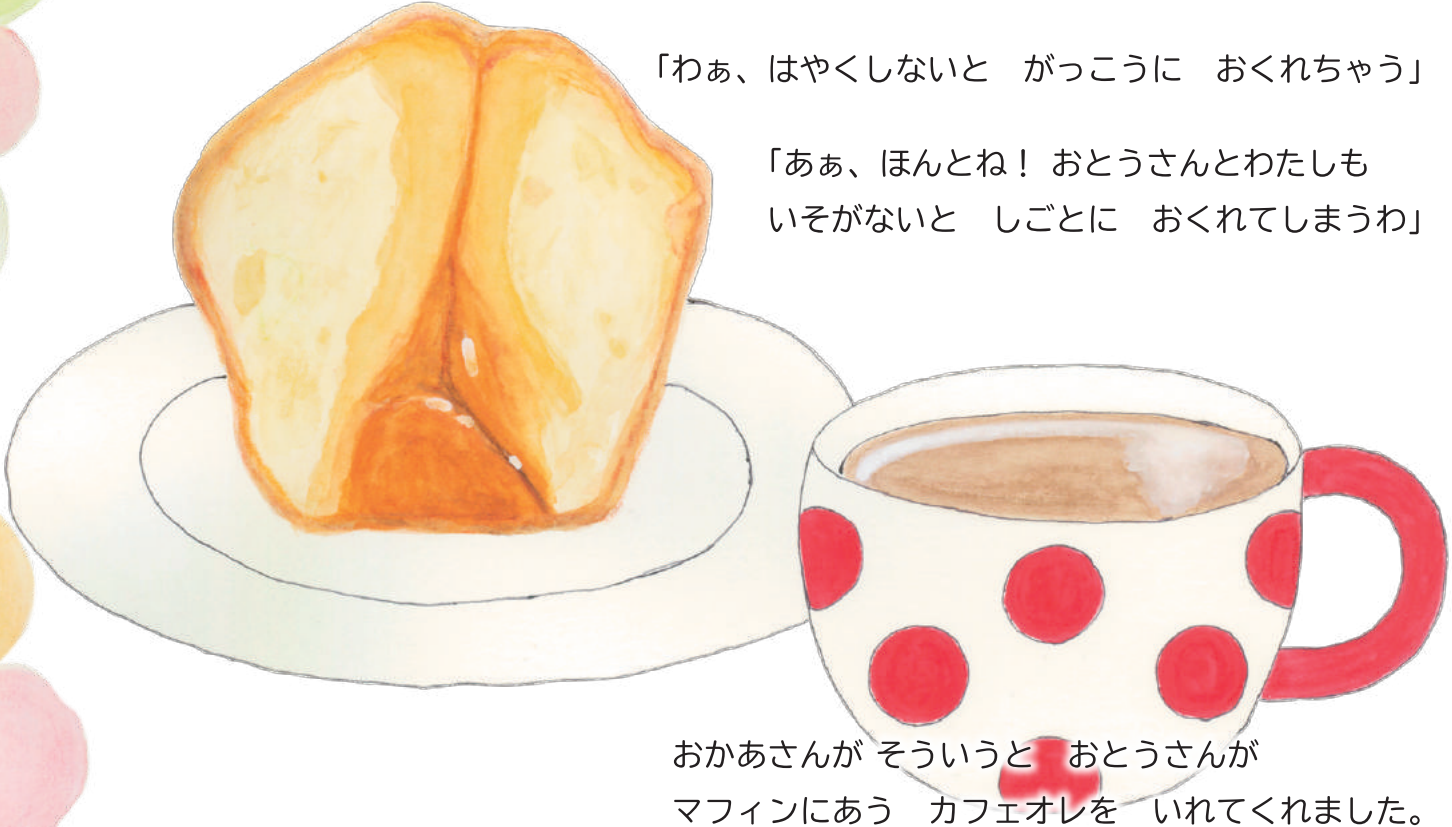
「ワンワン」

「わぁ！ マフィンだ。
『これ　あさごはんに　どうぞ』 だって！」

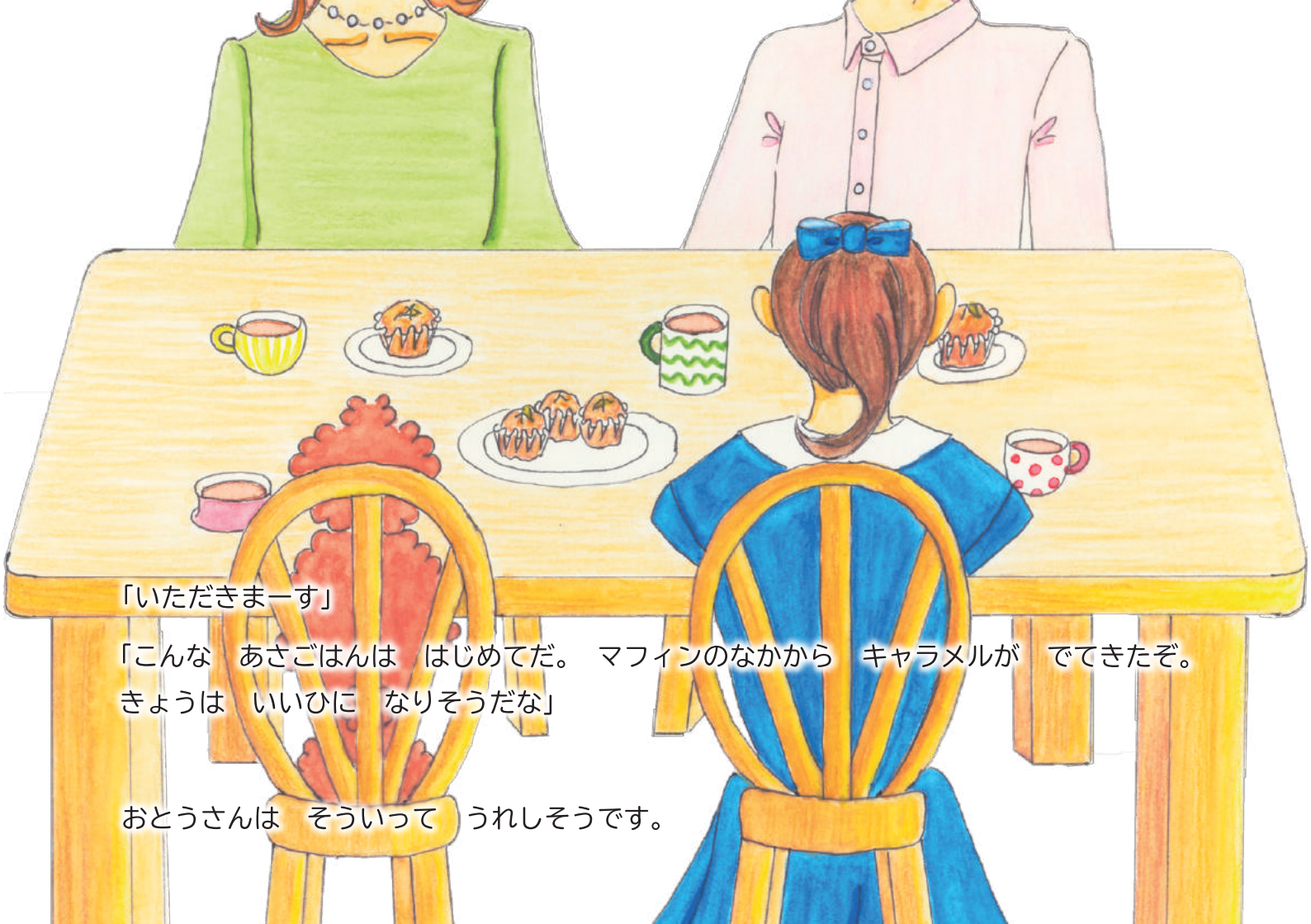
おとうさんとおかあさんは　まだ　わけがわからず　とまっています。

「わぁ、はやくしないと　がっこうに　おくれちゃう」

「あぁ、ほんとね！ おとうさんとわたしも
いそがないと　しごとに　おくれてしまうわ」



おかあさんが そういうと　おとうさんが
マフィンにあう　カフェオレを　いれてくれました。



「いただきまーす」

「こんな　あさごはんは　はじめてだ。　マフィンのなかから　キャラメルが　でてきたぞ。
きょうは　いいひに　なりそうだな」

おとうさんは　そういって　うれしそうです。

こうして　オノレは　パラディさんの
おうちの　かぞくになりました。
さて、これから　どんな　おはなしが
はじまるのか……おたのしみに。